

さなげかいゆうちようけいへい
猿投灰釉長頸瓶

<概要>

員数	1口
法量	高さ 28.7cm、口径 15.4cm、胴径 21.4cm、底径 13.3cm
時代	平安時代（9世紀後半）

本器は猿投窯産の灰釉長頸瓶の完形品である。高台は、外側に張り出し、断面形は台形を呈する。胴部はほぼ球形で、頸部はやや太く口縁部にかけて外反し大きく開く。ロクロ成形で、胴部と頸部を直接接合した「二段構成」である。胴部は回転ヘラ削り調整され、頸部内外面にはロクロ目（回転ナデ痕）が認められる。

灰釉は、口縁部内面から胴部下端にかけて刷毛塗りされており、やや光沢のある暗緑色を呈し、窯変¹によって濃緑色をした隆線状の流れが生じている。精良な素地土が用いられており、焼成は良好で、器肌は灰白色を呈する。これらの型式学的特徴から、猿投窯編年のK-90号窯式、すなわち9世紀後半に位置付けられる。

なお本器は、昭和末期に西尾市の八ツ面山東麓を流れる矢作古川右岸の河川敷に立地する、矢作古川江原橋下遺跡から出土したと伝えられている。八ツ面山には式内社²である久麻久神社が所在すること、また完形品で出土したことから祭祀関係に使用されたものと考えられる。

本器は、平安時代前期における猿投窯最盛期の技術力の高さを示す優品で、工芸品としての価値は極めて高い。また、当時の灰釉長頸瓶の使用形態を考える上でも貴重な資料である。

1 窯変：窯の内部で作品に生じた色の変化

2 式内社：延喜式に記載された神社。



猿投灰釉長頸瓶（愛知県提供）